



# フェローシップ・ニュース No.64



アディクション関連講座No.21 3/17 (月)

## ダルクの責任者による座談会 「私とダルクとの出会い」

参加者：幸田実氏（東京ダルク）、飯室勉氏（仙台ダルク）  
佐々木広氏（山梨ダルク）、司会：志立玲子（アパリ）

幸田氏：今、僕は荒川の東京ダルクで生活しています。うちは法人なので代表、責任者というのがいて、施設長として雇われている、という立場なのです。ただ、実質は、法人の責任者がいつもいるわけではなくて、僕とスタッフでいろいろと決めてやっていかなければならないので、実質的には責任者のようなことをやっています。

そのダルクに来て、21年になります。最初の出会いというのは、21年前は僕も覚せい剤をやっていた、いつ死ぬかな、このままいつか死ぬだろうな、と。使い続けられないというのはわかっていましたし、このまま薬を使い続けていくなんてことはあり得ない。だからとって止めることもできない。それはもう、このまま使ったらいつか事故とか自分が全く予測しないことで命を落とすのだろうなと思いつつも使い続けていたわけです。死にたいとか全く思わなかったです。薬を使い始めた頃から家族と一緒に住んでいなかったの、親は僕がいつまでもずっと薬を使っているということは知らなかったわけです。一度、26才のときに大麻で逮捕されているのですけれども、それで止めたと思っていました。でも何かやっているんだろうな、くらいには思っていました。まさかそんなにひどい状態になっているとは思っていませんでした。僕は使いながらシタバタしていたのです。一緒に住んでいた女性にも当然それはわかっていました。僕が薬を使っているのを知っていて一緒に同棲した彼女なのですけど、あまりに僕の使い方がひどいので、これはあかん、ということで、「もうお前治療しろ、病院行け、カウンセリング行け！」と散々言われ、親にもひどい状態だということがわかり、しょうがないから病院に行ったり、原宿相談室というカウンセリングに行ったりしました。しかし、さらさら止める気はなく、というより止めるということが想像できませんでした。頭の中で薬を止めるということがイメージできない状態だったのです。そんな生活をしていて、カウンセリングに行ってますから、薬を使って汗を垂らしながらカウンセリングしていて、「今日はクリーンですか？」と言われると、「はい」と答えて、何のために1時間に何千円も払っているのかわからないようなカウンセリングを受けていたのです。でもある時、カウンセラーに「最初からずっと使っているでしょ。クリーンだったときなんてないでしょ」と言われて、「はい」と言ったら、「もう来なくていいから」と言われました。

その頃ですよ、ダルクという名前を知ったのは。僕はテレビで見たことはなかったのですが、どうもダルクはその頃テレビにすごく出ていて、近藤さんもテレビでいろいろなインタビューを受けたりしていたみたいなのですが、僕はテレビなんてほとんど見なかったの、ダルクという存在を知らなかったのです。ダルクに行け、と当時付き合っていた彼女に言われて、ダルクという響きを初めて聞いたとき、どうですか？ 皆さん初めて聞いたとき、えーっ！ ていう感じじゃありませんでしたか？ あまり美しい響きじゃないですよ。僕もダルクと聞いたときに、「えー、何だそれ？」という感じで、よく話を聞いたら何か施設だ、薬を止める施設があるということを知って、全然行く気にもならないし、使い続けていました。僕の一番仲良かった友達がその頃に救急車で搬送されて、病院へ入って、そのあと川崎にある施設に入ったのです。本当にそういう施設というのが日本にあるのだということを知りました。その人の家族からもダルクということを知っていて、いろいろ情報を集めて、そうかダルクというのもあるんだな、と思いました。ダルクに自分で電話をしろ、と言われていたのを覚えていて、これは1回電話してみるかな、と思って正月に電話をしたのです。1月6日かそのくらいだったと思います。電話したら、「はい、ダルクです」と言って出て、「薬の問題でちょっと困っているのですけど」と言ったら、スタッフが、いきなり「シャブですか？」って聞いてきました。



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日  
2014年5月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。  
全国のDARCやMAC等の社会復帰施設、福祉・教育・医療・司法機関と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

ダルク責任者による座談会「私とダルクとの出会い」	1
ドラッグユーザーの健康は大切にされているのか？…古藤吾郎	4
アウェイクニングハウスからのメッセージ…ハース	6
木津川ダルクフォーラム案内	7
司法サポートのご案内 家族教室のスケジュール	8





それを聞いて僕はびびってしまっ  
て、いきなり電話で「シャブです  
か？」って聞いてくる奴いるか  
よ、と思い、こっちは覚せい剤で  
おかしくなっているから、覗かれ  
ているとか盗聴されているとか、  
そんなことで頭がぐるぐるになっ  
ているのに。「いや、もういいで

す、また電話します」と言って切ってしまいました。

電話を切ったその次の次の日に、一緒に住んでいた彼女と大喧嘩になって、そうしたら警察を呼ばれて、逮捕されました。1回目の逮捕というのは大麻で逮捕されて裁判になったのですが、全く止める気もないし、むしろ何で止めなきゃいけないの、逮捕されてもマリファナを止める理由というのが全く思い浮かばなかったの、これは逮捕されたのがまずいんだ、逮捕されないように使えばいいんだ、と思って出てきたわけです。

でも2回目逮捕されたときは、もう本当にいつ死ぬだろう、と思いつつ使っている状態で逮捕されたので、警察を呼ばれて、逃げようと思えば逃げられる時間は十分にあったんだけど、なんかもう逃げる気力もなく、ああ、警察が来るのか、みたいな感じでした。留置所に入れられたときに、なんというか、ホッとしました。何かやっと隔離してもらったというか、やっと薬から引き離してもらえた、というような安心感があった。でも僕は逮捕される直前に使っていましたから、頭はぐるぐるで何だかよく覚えてないです。留置所の中で離脱症状がきて、もうすごくだるくて、その時に僕はありとあらゆる薬を使っていた。覚せい剤と交換した何だかよくわからない睡眠薬がいっぱいあって、そういうのも飲んでいたので、留置所の中で本当に苦しい離脱症状だったのです。そんな中で取り調べが終わって、しばらくしたときに母親が面会に来て、「あなたどうするんだ！」と。どうするんだと言われてもまだ頭がぼーっとしているし、もう答えようがないというか、わからないよ、みたいな感じでした。そのときに言われたのは、「もうあなたのことはわからないから、ダルクという施設に行くのだったら、その面倒はみてやるけど、もしそうでないのだったら、もう自分で薬を使うなり、自分で好きなように生きてください。」と言われたのです。それは初めてでした。

最初に逮捕されたときも弁護士をつけてくれて、保釈金も出してくれたから、親が何とかしてくれると思っていたら、何か全然違う感じで、これは困ったなと思いました。「裁判はまだ先だから、自分でどうするのか考えておきなさい」と言われて、留置所で一応考えました。考えても答えは出ないのです。考えれば考えるほど出る答えというのは、ダルクなんて行きたくない、早く出て薬を使いたい。いくら考えてもそこに行き着くのです。1週間くらいどうしようかなと考えて、結局そこに行き着く。それで初めて気が付いたのです。これはおかしいなと。俺はやっぱりおかしいなと思った。これはもうダルクに行くしかないと思って、そのとき、今は亡くなってしまったのだけど、堀川先生という弁護士がついてくれて、裁判でもダルクの近藤さんという方を情状証人にするということを言われて、それで裁判になったのです。

その場で初めて近藤さんを見たのです。スーツを着て立派な格好をして、証人に立った近藤さんは何を言い出すかと思ったら、アメリカでは薬物使用を犯罪にしないんだ、みたいなことを言い出したのです。自分はダルクをやっていて、アメリカでは病氣として薬物依存を見ているんだ、という話をしだして、僕はこの人一体何しに来たのかな、と思いました。もうちょっとまともなことを言ってくれるのかと思ったら、自分の言いたいことばかりものすごい勢いでしゃべっているわけです。裁判官が怒りだして「ダルクの話はいいから、いい加減にしろ」と言い出した。近藤さんは全くお構いなしでした。「ああ、失敗したな」と思いました。僕は2回目の逮捕だったので、もしかしたら懲役に行くかもしれないと言われていたので、すがる思いで近藤さんに来てもらったのに、その結果がそれですから。

裁判官を怒らせてしまって、どうするつもりなのだろう、という気持ちでした。それが初めての僕のダルクの出会いなのです。

でも、執行猶予は5年でした。釈放になって、東京拘置所に母親が迎えに来てくれて、一緒にダルクに行ったのですが、そのダルクが汚いのって言ったらその当時のダルクを見たことある方いますか？ とにかくすごかったです。東京拘置所も建て直す前でもものすごく汚なかった。昔の監獄という感じでした。そこから出て、行った先のダルクが更に汚かったのにはもう本当に驚きました。

面接する部屋の壁は崩れているし「えーっ！」という感じでした。僕はダルクに対するイメージというのは全くなかったの、で、「ドラッグ・アディクション・リハビリテーションセンター」ですから、少なくともこの会場のようなところを想像していたわけです。それが日暮里の倉庫、壁が剥がれている倉庫ですから。もう言葉を失いました。スタッフが「今日からここで生活してください。じゃあこのベッドを使ってください」と言われて見たら、ベッドの布団が焦げているのです。どう見ても焦げた跡があるんですよ。これで寝るのかと思った。でも、それに抵抗する気力はなかったです。あまりのショックに。でも、不思議と汚さと不気味さが妙に心地よかったです。それは今でも覚えています。ここで良いんだな、と。それでダルクでの生活が始まったのです。面接のときに最初に僕が言ったことをよく覚えています。その当時のスタッフに最低でも3か月は頑張ってみてください、と言われたときに、いや、僕は1か月で結構ですから、と言って、ダルクに入ったのです。と言いながら21年もいるのですけども。それが最初の僕のダルクと出会ったときでした。それが最初の印象です。

**飯室氏：**仙台ダルクの飯室といいます。ダルクの現場にいると、社会的に地位があるとかないとかは、あまり関係ないかな、と。むしろ社会的な地位があった方が大変な薬中さんが多かったりするかもしれないし、どんな人でも薬中になるということだとつくづく感じています。ただ、当事者も特別なものだと思っているし、世間も特別なものだと思っているし、芸能界の問題だとか、特別な問題だと思われやすいですけど、全く現場にいると、どんな人でも薬中になる、というかそれは感じます。

うちもどちらかと言うと、商売をやっていて、兄貴も高校野球の監督だったし、小さい頃からちょっと特別っていう風には思っていたかな、自分自身が。それは高慢というのか。僕はダルクに来るまでは薬物が止められない、意思を強く持つ、何か月間か止まっても1回使ってしまったら全部だめ、という風にやはり思っていました。半年や1年止まっても1回使ってしまったら意志が弱いんだ、という風に自分のことを思っていた。僕は14年使いましたけど、小さいころは幸田さんもそうですけど、どちらかというとお坊ちゃん育てで、お坊ちゃんの良いところというのは、人をあまり疑ってかからないとか、人が良いというか。だけとお坊ちゃんの辛いところは、意地がないのです。周りが全部やってくれるから。それは俺にはありました。覚せい剤とかシンナーなのですが、ダルクに来て19年になります。僕は1回もダルクに来て使っていないです。特別ですよ。ただあまりラクじゃないな。なんか因果な稼業だなあという感じがします。でも今更引くに引けないし。あとは、やっぱり薬に酔っていたわけだから、覚せい剤で、毎日覚醒していたわけです。覚醒している人と健康的に生きている人と同じ成長するかと聞いたらしないです。





ラリっているのか酔っぱらっているのか睡眠薬を飲んで寝ているのか。だけど年齢に沿った見方しか世間ではされませんし、皆さんもそう思っているでしょう。だけど中身はやはりカスカスというか、そこに気づかされるし、

うちに来る人は気づいてないし、家族も気づいてないです。「止まればいいんだろ」みたいな。止まったときは常に世の中の人よりもマイナスです。心も体も。そのことは納得していただけますか？ だってラリっていたのですから。社会と同年代の人と同じような成長をしているはずがなくて、俺なんかだとうろたえてたろう？ ダルクに来て、いつも、それまで持っていた馬鹿にされたくないとか、なめられたくないとか色んなものがあって、鎧をまとっていたのです。相手が戦いを挑んで来て、こっちが戦いをやるのだったらいいのですが、勝手に一人相撲みたいに鎧をまとっているのです。だから、ダルクに居ても居心地は良くなかったです。その口の利き方がなめているのか、なめていないのかとか、そういうことばかり考えていました。毎日。意志とか根性だとか裁判でもそう言われましたけど、立ち直るとか行動をとるとかみたいなことばかり言われていたので、ダルクに来て何もしないのです。ダルクって…。

さっきの東京ダルクは壁が剥がれてひどかった。僕は東京ダルクに行ったとき「あ、綺麗だな！」って思いましたから。僕は茨城ダルクなのです。もうそれはすごいです。タコ部屋みたいなところで、本当に。1日3回くらい靴下を履き替えていたのだから。犬は家の中にいるし、猫は跳んでるし、そういうところでした。本当に田舎で、3Kの平屋の和式の家です。俺のときは15人くらいいて、床の間にも寝ていたし、布団の押し入れで2人寝ていたし、俺は廊下でした。

刑務所を出てきて、親に言われて、いろいろあったのですが、東京ダルクに電話したのです、僕はダルクに行かなきゃと思って。そうしたら、おたくは茨城だから近くに茨城ダルクがあるから相談に行ってくれ、と言われた。それで次の日の朝に相談に行ったのです。そしたら、俺は刑務所から出て来た4日目くらいだったけど、バシッと刑務所を出所するとき兄貴がブレザーとローファターの靴と全部用意してくれて出してくれたわけです。ですから何でも親がやってくれると思っていました。スタッフが面接してくれて、「おたく、どうしたいですか？」と。反省しているつもりで出て来たから、罪を犯して。何か話したら「僕も実は薬物が止まらなくて、刑務所に6回入っています。」というわけです。「えー、そんな人世の中にいるのか！」と思いました。普通のサラリーマンみたいなおじさんだったから。見た感じが。それから俺が面接しているとき、シルバーのネックレスを洗おうと思ってサンポールをトイレから出してきてそこで洗っている人がいました。目の前で。「ここ何なのだろう？ こいつ何なんだ？」と。俺には想像つかない世界でした。

スタッフがTバックのパンツはいて、日焼けして、ピアスして髪の毛が7色で長くて、俺の人生でそういう人はいなかったんです。そのおじさん何もしないんだけど、回復は足からだと言うんだよ。もう一人のスタッフがそれと対照的で、大きな体のスタッフがいて、その人が一人で動いていた。わからないことがあると指示されて。ここは何なんだろうなあと…。

ミーティングでは、初めて友部の教会に行き、何を話せばいいですか？ と聞いて、90分のところ45分しゃべった。その時泣きそうになった。今まで溜まっていたものがバーッと出た。よそいきで、いい子で会社のことばかり考えて、世間体ばかり見ていた。親の顔ばかり見ていた。当時、茨城県から横浜までタクシーで買いに行っていた。のちのち、交通事故で人を跳ねて人の命を奪っている。刑務所入る3年位前に。

その事故のことがバーッと出てきて、人を跳ねて命を奪って薬を使っている自分が許せなかった。味方もいない。身近に一人も。「お前そういう過去で大変だよな。」とは言ってくれなかった。そんなことまでしてまだできないんだ！って感じだった。その事故のことと、クスリのことを少し話せたかな。ミーティング中に岩井さんが途中で入ってきて、兄貴の話はいいから、お前の話をしろよと言われた。今になるとルール違反なんだけど。それから考えてしゃべるようになった。

その当時は1日1回のミーティングだった。午後は何もやることがなかった。犬の散歩くらいがやっとだった。落ち着かなくてソワソワして何か月か過ごした。幻聴も入っていた。それを隠していた。ワーカーの人に思い切って声が聞こえると言った。そうしたら、「勉強一生治らないよ！」と言われた。「上手に付き合えばやっていける病気だよ！」と言われて、お腹を空かさない、怒らない、一人にならない、疲れない。それを「HALT」というんだけど、裏返して見れば、怒って疲れて腹空かして一人だから、誰だってそれはイライラするわと思った。クスリを使っているときはそうでした。

19年前の阪神大震災の時に刑務所において、その年にダルクに入った。沖縄入って、名古屋行って、茨城戻って、それから仙台に行った。一番最初の責任者がスリップして、同時にスタッフが逮捕されてマスコミに騒がれて、誰も連絡くれなかった。右も左もわからなかった。その当時、教会で行き倒れしたフリした泥棒も世話していた。3ヵ月で出したら、ミーティング場に指名手配の写真が貼られていた。教会泥棒だった。いろいろ立て続けに起きた。記者会見もやった。それが俺の力になった。誰にも助けってもらえなかった。申し送りというのが一般的にはあるのだが、それもなかった。そういうところからのスタートだった。車も献品の車だった。ここからのスタートだと思った。それから入寮者集めて、助成金をどうやってとるかとか、シスターやカトリックの信者さんが皆助けてくれた。責任者になって17年目。何とかクスリ使わないでこれて、時々いいことがある。普段一人になると憂鬱になる。俺はダルクで一番短い期間で責任者になった。スーパークリーンだから、優等生をやってきた感がある。謙虚じゃないフリや、バカなフリして生きてないとダメかなって。最近そう思っている。だって事務所を任せても、社会性が足りない人もいる。40歳でコピーやFAX出来ない人もいる。車運転していて右に曲がってくれと言って、左に曲がったりする。だからトレーニングが必要で、ダルクはそういう場所なんです。人間関係も含めて。マイナスをゼロに戻す作業をするところ。昔は勉強が来たから金隠せと言われていたのが、5年位たったら勉強に任せたら安心だと言われた。保護観察所に行くと、飯室さんの言うことをよく聞くようにと言われる。変われば変わるもんだと。だけど受刑番号は419番だったし、薬物使った自分を忘れない事。仲間と会うことも必要。何年止まったら大丈夫ということではない。死ぬ人もいる。自分のことと思って生きていければ大丈夫。これがダルクの中で学んだことです。

佐々木氏：45歳になります。出身は岩手県の花巻市です。宮沢賢治の生まれたところです。僕のクスリは覚醒剤です。僕とダルクの出会い、僕が初めて覚醒剤を使ったのは22歳でした。たまたま友達からクスリ使ったことある？と聞かれて、なかったのに「ある」と言ってしまった。やったことあるフリをして使った。なんであの時に「ない」と言えなかったのか？

そこに至るまでの人生があった。僕は4歳から両親がいない。生後10か月の頃、母親に好きな男が出来ていなくなった。父親に引き取られるんだけど、父は交通事故で死んだ。4つから両親がいなかった。そこから育ての親に引き取られ、殴る蹴るで育つ。それを学校にも言えなかった。どこにも言えない。人に弱みを見せない。どこか友達に弱く見せられなくて、強かった。それが僕の始まりなんです。「ある」と言ったからそれで覚せい剤を持って来られた。





そこから初めて捕まるまで10年。22歳で初めて使って、ダルクに参上するのが36歳ですから、14年間ダルクに繋がるまでかかりました。その間、3度逮捕されて、2度刑務所に入りました。平成12年に捕まった時に拘置所に官本があって、受刑者に回ってくるんだけど、そこにダルクの赤い本があった。刑務官に「それ取ってください」と頼んだ時に、刑務官に「こんなの読んでもダメだ・・・結局、意思や根性だ」と言われた。今でこそ行けと言いますが、14年前はダルクは認知がなかった。結局、意思や根性だと刑務官が

一生懸命言っていました。それを思い出します。ダルクの本を見たのが初めてでした。

刑務所出てきて2週間ですぐ捕まった。その時に悟った。自分では何ともならないと。認めた瞬間に留置所の中でワンワンと気持ちよくなって泣いた。自分の手に負えない。自分で何ともならないって認めた時に気持ちがよくなって泣いた。実は心の中でわかってたなと。そんなことを思い出します。

刑務所から出てきてもまた行くんだなと思った。刑務所入るために生まれてきたわけでもない、覚せい剤を使う決心して育ててきたわけではない。ずっと止められないとわかったときに繰り返すのは嫌だなと思って、今度こそ出たら死のうと決心した。平成14年12月18日の夜。覚せい剤を覚えて12年目です。青森刑務所でした。

満期の4か月前に1冊の本と出会った。それは千葉マリアさんの書いた『馬鹿でもいいサー』という本だった。お盆休みの時に、名古屋の暴力団の組長がその本を読んで僕に勧めた。自分の息子さんが薬物で苦しんで、ダルクに行ったら良くなったという話。これを読んだ時に、気に入ったのは次の一節「自分の見ているチャンネルを変えない限り、人生は同じことが起き続ける。」これが気に入った。ナラノか家族会のどこかにある一節だと思う。俺もそうだったなと。それを他の受刑者に見られないようにノートに書き記した。保護司にダルクに行けば具体的なプログラムがあるらしいと手紙を書いた。保護司が日本ダルクに電話して、最寄りのダルクが仙台だったので紹介してもらい、ここにいる勉さんに電話して、面談をしてダルクに通じる道しるべを作ってくれた。平成16年11月に保護司と叔父さんと叔母さんが来て、「ダルクに行きなさい。利用料は私たちが応援する。」と言ってくれた。その時はどうにもならないと思ってますから、行ってみよう。

12月14日朝9時満期出所。11時頃、仙台ダルクに繋がった。僕と初めてのダルクの出会いです。玄関で勉さんに会って、まずハグをして、このおじさん覚えてないと言っているけど、僕はこう言われたと思っている。耳元でこう言った。「お前のこと全部わかっている！」と聞こえた。その瞬間に泣いた。握りこぶしを握って下を向いたまま、むせび泣きをした。小さい子どもが引きつけを起こしたように泣いた。

その時の感情というのは、一つはクスリとのケンカが終わる。あとは車輪が止まると思った。悪循環の歯車が噛み合って、もがいても悪くなっていく歯車が止まると思った。僕の表現で車輪が止まった。9年3ヵ月経った。車輪は止まるどころか、逆に回り始めた。それが僕のダルクとの出会い。

僕はどんな女の人の腕の中でも泣いたことはございません。一度たりとも泣いたことはございません。ところがですよ、聞けばこの方は、ミーティングで分かち合いしていると、筑波の山中を女の人のパンティをかぶって素っ裸で捕まったらいいじゃないですか。その人の腕の中で泣いたんですよ。その話をダルク25周年でメッセージしたんですよ。そうしたら勉さんに呼ばれて、「違う。俺はパンツかぶってない。はいてた」というわけです。それだけど、もういいかなって、クスリ止めてどうでもいいかなって思う訳ですよ。恥ずかしい正直な話を話せる場所はダルクに来るまではなかった。正直になるとか、弱さを相談することを学んでいたら、あの日22歳の夜に、使ったことがないのにあるよと強がりと言わなかった。このダルクというところで10年間、正直になること、弱くていいこと、自分が困ってることを相談すること、助けを求めること、それを学んできたなと思います。僕とダルクとの出会いです。

## 「ドラッグユーザーの健康は大切にされているのか？」 — シドニー視察を通して」

ソーシャルワーカー 古藤吾郎

いきなりですが、オーストラリアのある父子のエピソードをご紹介します。オートバイ購入をめぐる父子のやりとりなのですが、10代後半の息子がオートバイに乗りたいと父親に告げ、父親はそれに猛反対しました。しかし、何を言ったところで息子はアルバイトしてバイクを購入するであろう、と父親はわかっています。そこで父親は息子とともにバイク屋を訪ね、もっとも安全だというヘルメットやプロテクターを買いました。それを身につけてバイクに乗るという条件に息子は合意したのです。バイクに乗るようになった息子はある日、事故を起こ



「馬鹿でもいいサー  
：薬物依存症からの再生、そして愛」  
千葉マリア著  
モッツ出版  
2004.4



東京は厳冬の2月、南半球のシドニーは夏日でした。



しました。しかし、大事に至ることはなく、やがて息子はバイクに乗らなくなったとのこと  
です。

この父親は、長年、オーストラリアでの薬物使用問題に取り組んでいる医師です。ドラッグユーザーが他人ではなく自分の息子だったらどうするだろうかと考えたとき、もっとも大切にしたいのはドラッグユーザーの健康だと話します。息子がバイクに乗ることを止められないように、ドラッグユーザーがドラッグを使わないようにコントロールすることは非現実的で、それならば、ドラッグを使うなかでいかに安全で健康でいられるのかを気にかけるという考え方なのです。

ドラッグ使用はいずれ止まる、あるいは依存症から回復していく方法があるでしょう。しかし、たとえば回し打ちをして注射器を共有すればHIVやC型肝炎に感染する可能性があります。感染して治療をしなければ命を落とす場合もあるし、治療しても生涯ウィルスを持ち続けることもあります。使い方によっては過剰摂取（オーバードーズ）で死に至ることも。ドラッグ使用を止められなくても、そうした健康のダメージを少しでも防ぐことが実用的で大切なことであろうと話します。

そこで、回し打ちで感染症にかかることがないように使い捨て用の注射器を配布するというサービスがシドニーで始まりました。さらに、看護師が常駐する行政公認のドラッグユーザー向けの注射できる施設も整備され、その結果、HIVやC型肝炎に感染したり、過剰摂取で死亡するドラッグユーザーの数が減少したのです。

こうした考え方や取り組みが行政レベルで取り入れられているオーストラリアのシドニーを、ダルクスタッフ、法律学者、精神科医療関係者等によるグループが視察で訪れました。幸運にも私も参加させていただくことができたのです。そのときにこの医師から講義を受ける機会に恵まれました。さらに、薬物依存症のリハビリ施設では入寮者と交流することができました。薬物の再使用を防ぐための施設なのですが、トイレに使い捨ての注射器を含む薬物摂取の安全キットが置いてあり、入寮者はそれを自由に手にすることができます。ここでは回復を目指すなかでも再使用する人がいるという事実を現実的に捉え、健康のダメージを少しでも減少させるため、このキットが配布されています。こうした取り組みについて入寮者の考えを尋ねたところ、次のように話してくださいました。



【リハビリ施設内で配布される安全キット】紙袋のなかには、NAや感染症のホットライン情報も入っている

最初は、クスリを止めようとしているのに注射器が置いてあり、引き金になったらどうするのか、と憤りを感じた。けれど、現実的な捉え方であり、健康を最優先とする考え方を学び、必要なものであると納得した。それに社会にできれば、もっとたくさんの引き金があるのが当たり前。今は、トイレに注射器が置かれていることが気にならなくなった。誰かがこの安全キットを使用したとすれば、その人の健康のダメージができるだけ少ないことを願うようになった。

これはオーストラリアでの話です。では日本はどうなのでしょう。アパリでの司法サポートを通して違法薬物の使用で逮捕された人たちと出会います。クスリが止まらず自ら交番に出頭した、という話もこれまでに少なからず聞いてきました。クスリが止まらないのであれば医療施設やリハビリ施設に相談してほしいと願うばかりですが、取締り機関にSOSを求めてしまうのです。医療従事者が患者を通報しようとするだけでなく、使用者本人でさえも、医療ではなく司法が問題解決の術であると信じてしまっているのです。つまり、ドラッグユーザーの健康が大切だというメッセージが、この社会からはほとんど発信されていないのだろうと痛感します。シドニーを視察し、日本との捉え方のギャップをあらためて目の当たりにしました。私が担当するドラッグOKトーク（ドラッグユーザーのためのウェブサイト&ホットライン）では、健康がもっとも大切なのだというメッセージを少しでも伝えていけるよう、これからも励んでいきたいと思ひます。



政府公認のドラッグ注射施設  
医療スタッフが常駐している  
ので、いろいろな相談もできる。



**ドラッグOKトーク** OK!

**ドラッグの話、なんでもOKなホットライン**  
ドラッグを使うことがあったり、使わないことがあったりする人とそんなともだち、こいびとのためのホットライン  
※利用者のプライバシーは保護されます

ドラッグの話、なんでもOKなホットライン  
☎ **090-4599-6444**  
あなたの番号を通知したくないときは↓  
☎ **184-090-4599-6444**  
水・金 12時～夕方6時（休日のぞく）  
LINEの無料通話もOK! → [もっと詳しく](#)

ドラッグOKトークのウェブサイト  
<http://ok-talk.com/>



## アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

### 「変わってきてる私？」

バース

皆さん、こんにちは。私は今年で43歳になります冴えない？おやしです！！  
さて今回、私がダルクに繋がるまでの話しをさせていただきます。

私は、高校をなんとなく卒業して、なんとなく就職し、その会社というのがお金を扱う仕事で、その仕事内容と云ったら、年度のノルマ、上・下半期のノルマ、一日のノルマ、午前・午後のノルマと……。『ノルマ！！』との闘いでした。そんなプレッシャーの毎日の中で日々を送っていました。

ある日、そんな忙しい日々の中で会社の上司に「飲みに行かないか？」と誘われ、私は元々お酒を飲める方だった為、上司とよく飲みに行く機会が増えていきました。思い返すと、その時からですか……。お酒を飲むようになったのは……。しかし、いくらお酒を飲んでその日の鬱憤を晴らしても、また、次の日からはノルマと闘う日々の始まり。そんな生活に嫌気が差し、学校を出たての若造が世間一般で言う責任感などひとかけらも無くすぐに退職しました。そんな中、その当時によく遊んでいた仲間に建設業の仕事に誘われいわゆる職人の世界に入ることになり、職人の世界といえは当然のごとく仕事が終わればその足で居酒屋へ～。こんな毎日でした……。

そして、酔っ払って先輩の家に着くと、その先輩が「お前、覚醒剤って知ってる？」との質問に、「知ってるけど使ったことはない。」と答え、当然のごとく「やってみる？」との言葉に、酔っていた私は何の抵抗も無く腕に注射をしてもらいました。なんだかすう～っとした感じというか、今までのお酒の酔いがすっと取れて、何だかものすごく自信に満ち溢れるというか、なんだか解からないが気分がすこぶるよい感じになりました。使い始めの頃は、週に1回位のペースで覚醒剤を使用していたのが段々使用するペースが縮まり、毎日覚醒剤を使用することになりました。普通はだいたい覚醒剤を使用していると、仕事とか休みがちになると言いますが、私の場合は違って、その逆で仕事が楽しくてしょうがなくなり、残業はもちろんのこと、日曜・祭日も喜んで仕事するようになり、その頃は、覚醒剤のために仕事をしている感じでした。当然借金もかなり作りました。そのたびに、親に無心したことも何度もありました。

そうこうしているうちに、段々私の周りの雲行きが怪しくなり、自殺してしまう仲間、逮捕されてしまう仲間、そのうちに私も逮捕されると思い、その恐怖に打ち勝つ為に、注射をするとか何とか訳が判らなくなり、それでも覚醒剤を止めようとは思わず、毎日繰り返し使用していました。そんなことをしているのも長くは続かず、とうとう逮捕されることに……。

しかしその時は、覚醒剤で逮捕されても執行猶予ですぐに出てこれるとの思いがあり、実際もそのようになり、何の反省もすること無く出てきて何ヶ月も経たないうちに、また覚醒剤に手を染めていくようになりました。こうなってしまうと、ブレーキも利かず、当然のごとく親にもすぐに解かってしまい、今度は親が警察に通報し、2回目の逮捕となり刑務所に行くことになりました。刑務所に行くのは嫌だけでも、これで覚醒剤は止められると思ひ、受刑生活を送っていました。約3年の受刑生活を終え、社会に出て心配なことがありました。それは地元の友人達がまだ覚醒剤をやっているのではないかと不安でした。しかしそんな心配も無駄だったようで、皆真面目に生活していてホッとしたものです。それからしばらくの間は、元々お酒が好きなこともあり、晩酌くらいで済んでいたものが、ある日を境に昼間からというか、朝からお酒を飲むようになりなっていました。

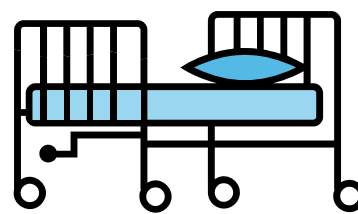
私は趣味でやっているサーフィンがありまして……。そこで知り合った女性と交際し結婚することになり、妻もお酒が好きで、さすがに朝からお酒を飲むことに関しては、注意を受けていました。そんな事もお構い無しに仕事に行く途中でお酒を飲み続け、ちょうどそのとき辺りから仕事先で、お酒でのトラブルが続き、お酒を体の中に入れていないと体が変わるということに気付き、病院で診てもらうことに……。すると、あなたは「アルコール依存症です！！」と言われ、すぐに入院となり3ヶ月の入院で、退院してから少しの間は、お酒も飲まずにいたのですが、お酒は覚醒剤と違い法律で禁じられているわけでもなく、その辺で安価で手に入ることをよいことにすぐ連続飲酒に戻り……。そうすると、1回目の入院のときに妻と約束した「また入院したら離婚する！！」と言われていて、当然妻の私に対するお酒を飲むなと言う締め付けが日に日に強くなり、その頃から妻への暴力が始まり怪我をさせるということもありました。それでも隠れてお酒を飲み、お酒を止めることができずひどくなる一方で、2回目の入院になりそれで妻も痺れを切らし離婚することになりました。



それでも私は全然反省するどころか、離婚したことで『悲劇のヒロイン！？』気取りで、お酒を以前よりも多く浴びるように飲み続け、結局6回も入退院を繰り返しました。

それで今回、病院のドクターの勧めで日本ダルク アウェイクニングハウスへ入寮となり現在に至っています。施設での生活は、プログラムが中心の生活で過去の自分と向き合う時間がたくさんあり、お酒でおかしくなっている時に迷惑や心配をかけてしまった人のこと、特に家族、離婚した妻、そして息子。当然何らかの形で家族や離婚した妻には埋め合わせをしなければならないのですが、ここで毎日のミーティングをして慌てても仕方が無いことに気づき、きちんと回復してからでも遅くはないと思えるようになりました。

施設での生活ですが、始めは不安だらけでしたが、何か解らない事があった時は仲間が気持ち悪いくらい親切に教えてくれる為、何の不自由もなく私自身の回復への道を歩んでいます。施設に来てははっきり言える自分の変化は、藤岡名物？のエイサーです。最初に見たときは、俺には『絶対無理！！』と決めつけ、練習にも熱が入りませんでした。ほんの少しのきっかけでエイサーが好きになり、難しい演舞なんか教わっているときは昔はすぐに投げ出していたものを、今ではなんとかかんとかやり遂げている自分の姿がそこにはあります。そのことを思うだけでも、少しは自分に変化があるのかと感じています。施設での生活が何の問題もなく送れているのもスタッフをはじめ、たくさんの仲間がいてくれるからだと確信しています。今度は自分が新しい仲間へ、自分が伝えてもらったことを伝えていければと考えております。



お待たせしました！  
「拘置所のタンポポ」  
が増刷されました！

### 拘置所のタンポポ

日本ダルク代表  
近藤恒夫 著

- 目次
- プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ
- 第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生
- 第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか
- 第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界
- 第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
- 第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか
- 第6章 新生した仲間たち

■発行：双葉社  
価格：1,400円（税別）

※お買い求めの方は下記へ  
FAXでお申込みください。  
FAX：03-5312-7588  
日本ダルク インテグレーションセンター・杉本まで

※住所、氏名、電話番号、ご希望数をご記入ください。

## 木津川ダルク 開設記念フォーラム 6/14・15

会場：木津川市交流中央会館「いずみホール」（木津川市木津宮の内92）  
交通：JR奈良線・関西本線・東西線・学研都市線「木津」駅 徒歩15分  
駐車場有30台

日時：6月14日（土）13:30-17:00

最新の薬物問題事情勉強会 「薬物依存とその回復を理解する」

講演者：

嶋根卓也氏（国立精神・神経医療研究センター 薬物依存研究部 心理社会研究室長）

「脱法ドラッグを使う若者たち～変わる薬物・変わる治療～」

丸山泰弘氏（立正大学 法学部准教授）「注目されるハーム・リダクション政策」

森田邦雅氏（東京ダルク セカンドチャンス施設長）「ダルクでの支援とは」

資料代：1,000円

日時：6月15日（日）13:30-17:00

木津川ダルク開設記念フォーラム「新たなる挑戦～多様な支援とその回復～」

シンポジスト：

西崎勝則氏（奈良保護観察所 統括保護観察官）「依存症ケースにかかる支援業務の実際と展望について」

中元総一郎氏（汐ノ宮温泉病院 精神科医）「薬物依存者との出会いと条件反射制御法」

石塚伸一氏（龍谷大学 法科大学院教授）「ダルクの支援を通して」

近藤恒夫（アパリ理事長）「30周年を迎えるダルク」

ダルク利用者よりメッセージ。近隣ダルクよりメッセージ。

参加費：無料

お問合せ：木津川ダルク 電話&FAX 0774-51-6597

主催：NPO法人アパリ 木津川ダルク



皆様のお越しをお待ち  
しております！！





特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

○アパリ東京本部  
〒162-0055  
東京都新宿区余丁町14-4  
AICビル1階  
電話：03-5925-8848  
FAX：03-5925-8984  
Email：info@apari.jp

○アパリ藤岡研究センター  
(運営：日本ダルク アウェイク  
ニングハウス)  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313

○入寮費：月額¥160,000  
(初月のみ¥175,000)

\*生活保護の方も可能

○入寮条件：薬物依存症から回復  
及び自立をしようとしている本  
人。男性のみ。年齢制限はありま  
せん。

○入寮期間：個人により差があ  
るので、話し合いながら決めてい  
きます。



ホームページがリニューアルしまし  
た。ぜひご覧ください。

<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成26年5月1日発行  
定価 1部 100円

### <アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対す  
る支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、  
再犯防止に向けた何の取り組みもないまま  
執行猶予の判決を受け、また薬物のある日  
常に戻るしかない日本において、はじめて刑  
罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。

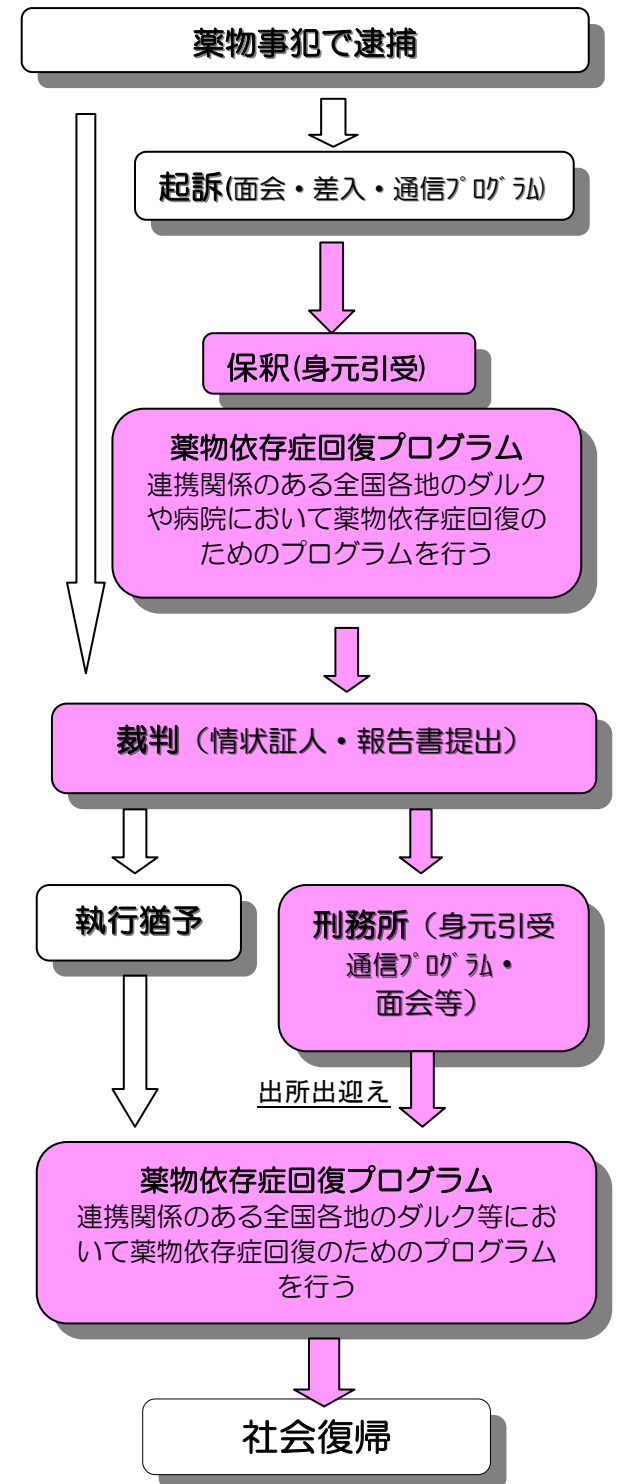
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プ  
ログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮  
契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相  
談などあらゆるニーズにお応えします。なお、  
日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%です  
が、アパリの司法サポートを利用された方の  
再犯率は10%以下です。最近では特に、**受  
刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期  
釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋  
げるお手伝いをしています。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方の  
司法サポートも行っています。(窃盗、横領、  
詐欺等)ご相談ください。

[費用：コーディネート契約料として一律20万円  
(税別)。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

【お問合せは東京本部まで】

### アパリの支援



### <アパリ・家族教室>

第1月曜	連続講座・テーマ	第3月曜	アディクション関連講座・テーマ・講師
5/12(月)	第7回 薬物問題を持つ人の家族の 回復プログラム	5/19(月)	No.23 「アパリ・ダルク今後の展望」 近藤 恒夫(理事長)
6/2(月)	第8回 あなたの環境や状態をいいものに 変えよう	6/16(月)	No.24 「保護観察官の仕事」 生駒 貴弘氏(長野保護観察所所長)
7/7(月)	第1回 薬物依存症によるダメージと回復	7/21(月)	祝日のため休み
8/4(月)	第2回 薬物の欲求と「きっかけ「危険な状況」 への対処について	8/18(月)	No.25 「アルコール依存症とは？」 竹内 達夫氏(アパリクリニック理事長)
9/1(月)	第3回 薬物依存症者の心にある2つの考え	9/15(月)	祝日のため休み

#### 【対象】

○連続講座(全8回)は家族のみが参加可能で、どの回からも参加できます。

○アディクション関連講座はどなたでも参加できます。

【時間】18:30~20:30 【場所】アパリ・インテグレーション・センター 1階会議室

【参加費】3,000円(2名以上の場合は4,000円) 【申し込み】不要